

滋賀県立琵琶湖博物館
第三期中長期計画

令和7年度（2025年度）内部評価

令和8年（2026年）7月

内部評価 総評

(館長による総評)

第三次中長期基本計画の5年目として、6つの事業目標の実現に向けて各重点事業を推進するとともに、中間段階として計画の見直しを行った。

ウェブサイトやJ-STAGEでの研究成果発信、デジタルミュージアムのコンテンツ追加と公開による資料の利用促進、展示室のインターネット環境改善による「観る＋使う」展示への成長、YouTube動画やSNS発信等による博物館の知名度向上など、様々な場面でICTの活用による発信や利用が進んだ。研究や資料利用の発信を促し、より多くの人々が利用できる使いやすい博物館に向けて、一歩前進できたといえる。

事業目標1においては、総合研究をはじめとする研究の推進により、琵琶湖地域の魅力や特徴を掘り下げ、その成果を一連の企画展示やトピック展示で紹介することができた。ギャラリー展示では、琵琶湖地域で研究を進め標本・資料を収集してきた研究者の足跡と、当館に寄贈され整理・登録が完了した研究標本・資料を公開することができた。このことは、研究活動と資料の収集・整備といった、外からは見えづらいが博物館の根幹となる活動を、展示を介して広く紹介するとともに、琵琶湖地域の魅力と価値を発信する博物館ならではの一連の活動といえ、事業目標1、2、4への進展ともいえる。今後は、次の総合研究の立ち上げや、地域の人々や国内外の研究者との研究をさらに進める必要がある。

事業目標3に関する進展としては、地域の個人・企業・団体との交流や連携が進んだ。地域団体や関係機関との協働による交流事業の充実の他、びわ博フェスでは「フェスとも運営部」という制度が新設され、主体的に運営の一部に携わることができるようになった。びわ博フェスでは、こども・若者の活動発信と交流の場として「こども若者研究発表交流会」を初めて開催し、中高生を中心とした研究発表と相互の交流の機会を作ることができた。昨年度に引き続き、環境学習センターによる県内事業者等を講師とした環境保全活動交流会も開催され、環境保全活動に関心のある企業・団体同士の交流と学びあいの機会となっている。こうした活動により、出あい、学びあいの場としての機能が充実してきている。

企業・団体との関わりについては、これまでの制度による寄附・支援の他、水族企画展示への物品寄附や、「こども若者支援事業」への助成による「生き物ふれあい体験・ワークショップ」や「絵本製作プロジェクト」を実施することができた。ラッピングパッカー車による広報活動への支援など、博物館活動を支える多様な取組が生まれていることは、事業目標6の進展といえる。今後はこれらを活かして、安定した活動基盤を確保する仕組みづくりにつなげていきたい。一方で、寄附や支援によって育まれた企業・団体との信頼関係が、環境学習会の開催や環境学習教材の開発、地域の環境保全活動に発展する例も増えている。今後、企業との連携と環境学習・交流系の活動を有機的につなぎ、事業目標3における幅広いニーズに応える交流事業や、環境学習における多様な主体との協働の仕組みの構築を進めていきたい。

課題としては、事業目標6の老朽化した施設の改修、事業目標2の収蔵空間の環境改善、事業目標1の研究環境の整備において、依然として改善が進まない状況が続いている。研究備品の調達、収蔵庫内環境の可視化やIPM管理体制の改善、当館独自の施設整備修繕計画に基づく改修など、できる範囲の努力は行っており、少しずつ改善はしているが、抜本的な対応が必要となってきた。また、事業目標4の誰もが楽しみ学べる展示や、事業目標5の来館しやすい環境の整備についても、

改善の余地はあると考えられる。

こうした状況を踏まえ、また社会の変化や博物館のこれまでの取組の成果も振り返ることで、第三次中長期基本計画の後半5年間に向けた中間見直しを行った。その結果、現状では改善の難しい課題の解決に向け、事業目標6を「持続可能な博物館づくり」と変更し、重点事業を「長期ビジョンの策定」「施設・設備の大規模改修」「安定した活動基盤を確保する新たな財源の仕組みづくり」とした。新たな事業目標の達成に向け、2025年度にはその準備に着手し、施設や機械整備の老朽度・健全度調査にかかる予算の確保、安定的な研究活動に資する仕組みづくりの検討などを行った。2026年度は、開館30周年記念事業の実施によりこれまでの30年間の活動を振り返りつつ、2025年度の準備を活かして、後半5年間の活動および未来に向けた方向性の検討を進めていく予定である。

○事業目標 1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

- ・ **実施目標**：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。
- ・ **評価指標**：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

- ・ **内部評価**

総合研究は一定の成果を収めて順次成果を公表中であるが、次の総合研究の確立には至っておらず、計画の進捗としては十分ではない。研究成果の外に向けての発信も体制構築はしたものの、まだ十分に活用できていない。備品類の整備は大型案件2件が進み、水質分析方面で充実が図られた。今後は、別分野の調達に向けて計画の再構築を行う必要がある。

- ・ **各重点事業の目標と実施状況**

- 1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

(実施状況と評価)

原著論文40件、専門家向けの記述50件など研究成果は例年並みに公表された。総合研究は最終年となり、琵琶湖博物館研究調査報告書として各成果を取りまとめて公表する準備を進めた。また、成果をもとにした企画展示「川を描く、川をつくる—古地図で昔の堤をさぐる—」を開催するとともに、やはり総合研究の成果を生かした令和8年度企画展示「博物館はタイムマシン—魚類学者がみた琵琶湖」の準備を進めた。一方で、新しい総合研究は立ち上げに至らなかった。

- 1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

(実施状況と評価)

ウェブでの論文内容紹介は4件増えたが、全体としては低調にとどまった。J-STAGEでの研究調査報告書の公開は2号追加し、年間ダウンロード数も約1万4千件と順調に推移している。体制は整ったものの、発信に対する積極性が強くない状況となった。

- 1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

(実施状況と評価)

令和7年度に大型備品である水質分析装置を調達し、令和8年度にもガスクロマトグラフィーの調達予算を確保するなど、一定の進展があった。一方、中規模機器の調達計画は見通しが立たず、難航している。

○事業目標 2 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

・ **実施目標**：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

・ **評価指標**：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

・ **内部評価**

今年度も収蔵空間の設備更新と IPM の管理体制の強化が大幅に進んだ(年報 4-3 参照)。一方、防虫に対するリスク管理のさらなる強化が必要である。デジタル博物館のリニューアルを通じて、資料の公開が大幅に進んだ。また、海外の研究者からの利用の問い合わせも増え、目標に向かって着実に成果をあげている。

・ **各重点事業の目標と実施状況**

2-1. 標本・資料の管理体制の強化

(実施状況と評価)

収蔵空間の保管・作業環境の改善：民族収蔵庫の加湿装置と映像収蔵庫の扉を修繕し、収蔵空間の煙・熱感知器と非常灯のほぼすべての交換することで、環境を改善した。

環境改善に向けた予算申請：地学収蔵庫の収蔵棚増設について令和 8 年度当初予算枠外要求に申請したが、通らなかった。本件については、今後も粘り強く申請する。

IPM 体制：燻蒸ガスを更新し、新体制を定着させた。また、目に見えない汚れや菌等を可視化する装置を導入したことで、各収蔵庫の清浄度が数値化され清掃目標の設定が可能となった。

防虫防黴のリスク管理：荷解室の不要物を大量に廃棄し、清潔な環境作りを推進した。また、収蔵庫の二重壁内を清掃できるよう予算を確保し、生物の増殖を軽減する対策を講じた。

水族：近年の猛暑対策として、冷却装置を複数台追加し、資料の一時保管体制の見直しを行った。年度途中で 5 時間程度の停電に見舞われたため、対応マニュアルの作成を進めている。

2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進(年報 4-2-(7) 参照)

(実施状況と評価)

電子図鑑・研究遺産：著作権の切れた文献の電子化や琵琶湖博物館に収蔵された、琵琶湖とその周辺の研究に偉大な足跡を残した研究者の研究資料の写真(研究遺産)を公開した。利用を促進するとともに、DB の運用改善のための対策を講じた。

びわはく GIS に、新たに昆虫観察データを追加し、背景地図と検索方法について大幅な更新をした。その結果、昨年度と比べ、びわはく GIS を訪問するユーザーが 10 倍以上に増えた。

2-3. ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

(実施状況と評価)

2024 年度に公開した電子図鑑および 3D モデルのページを大幅に増補してリニューアルした。また、展示室にウェブコンテンツを公開できる設備の更新も行った(年報 4-2-(7) 参照)。

ウェブ図鑑の公開： ホームページ内の「ウェブ図鑑」に新たにデジタル博物館というコンテンツを追加し、3D や電子図鑑、びわはく等の最新のコンテンツを公開した。

展示室へのコンテンツ提供：常設展示内に QR コードを設置し、博物館の YouTube 動画などを閲覧できるようにすることで、ICT を駆使して楽しめる展示へ貢献した。

○事業目標 3 みんなで学びあう博物館へ

・ **実施目標**：交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の学び合いが新たな活動につながる環境を創ります。

・ **評価指標**：利用者が実施者になった多様な環境学習・交流事業が実施される学びあいの場を通じて、多様な活動が活発に展開される。

・ **内部評価**

本年度は、地域、学校、機関、市民など、多様な主体を結ぶ交流事業を戦略的に推進し、企画、運営、体制、対応力を総合的に向上することを促進した。また、単発型から継続的な関係性創出型へと転換することや多様な交流への展開をより質的に推進することに注力した。その結果、主体的な関わりが増え、担い手の内発化を徐々に実現し、多様なニーズに応じた学びあいや継続的連携に発展し、「みんなで学びあう博物館へ」と創出の拡大につなげた。

次年度は、はしかけやフィールドレポーター、フェスともなどの協働機能の促進・強化のほか、環境学習センター事業の全体的かつ根本的な見直しや改善を行う必要がある。

・ **各重点事業の目標と実施状況**

3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

(実施状況と評価)

本年度の交流イベント事業は、年齢層、関心分野、開催地域の多様及び利用者の幅広い関心や参加形態に応じて開催した。また、地域連携（共催を含む）による事業の実施件数が増加し、地域団体、関係機関等と協働して企画・運営を行う体制が拡充され、学芸員の専門性を生かしつつ、地域の多様なニーズに応じた支援・連携が図られた。（館内 55 件、館外 38 件）。そして、はしかけ制度およびフィールドレポーター制度においては、グループ間で協働した活動やびわ博フェスなどでの出展など、企画立案や事業実施に主体的に関与していた。また、1000 件を超える問い合わせに対応しており、質問コーナーやメールによる質問などによる交流機能を果たしている。

さらに、環境学習センター事業においては、大きく 4 つの柱となる事業を①環境学習を支えるネットワークづくり、人材の育成②環境学習の企画サポート、コーディネート③次世代育成型環境学習の推進、啓発④環境学習に関する情報収集と発信を推進した。

①と③に関しては、特に初心者向けの体験学習やワークショップ、紹介展示（計 7 回）、実践と研究をつなぐ「琵琶湖学習」イベント（計 2 回）、県内事業者による環境保全活動交流会（計 1 回）、淡海こどもエコクラブ活動交流会（1 回）を実施した。②と④に関しては、学習に関する相談（計 267 件）、観察キットなどの貸出（計 99 件）、環境学習企画サポート、情報の提供・発信を行った。しかしながら、環境学習センターは、環境学習の相談窓口としての認知度が低い状況にある。

今後も引き続き、専門性等を活かしながら環境学習活動者のネットワークづくりと交流の活性化、情報収集・発信機能などを強化していく必要がある。また、多様な主体（地域団体、行政、企業など）との協働を仕組み的に創出する必要がある。

3-2. 出合いの場の創出

(実施状況と評価)

びわ博フェスは、これまでの継続的な取組を経て、はしかけ、フィールドレポーターの他にも多数の団体が出展するイベントとして定着してきた。2024 年度に開始した「フェスとも」の取組を発展させ、出展者（「フェスとも出展部」）の他に、フェスの運営に携わりながら博物館

のことをさらに知る機会として「フェスとも運営部」を創出した。また、「びわ博子ども若者研究発表交流会」を実施した（小中高生から9件の発表）。熱心に活動に取り組む学生の学びあい、出会いの新たな場となり、活動の励みにもなったと好評であった。

ワークショップの定員や会場の物理的なキャパシティや無理の少ない運営のあり方も視野に入れながら、次年度以降のフェスのあり方を検討する。

3-3. 「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

（実施状況と評価）

今年度の教職員研修では、体験的学習を取り入れる意義や実施する目的設定の重要性を伝達した上で、模擬授業形式でプランクトン観察や押し花づくりなどを受講者が実際に体験する形で行った。受講直後に自由記述によるアンケートでは、「体験の大切さの再確認できた」や「体験的な学習や公共施設を効果的に活用した授業づくりの重要性について深く考えることができ、大変学びの多い研修だった」、「学校の敷地内や近隣の自然環境（校庭の木々、近所の小川など）を「生きた教材」と捉え、日常の授業の中で、季節ごとの観察活動や生き物調べなどに取り組んでいきたい」といった、学校現場で体験的な学習を取り入れる教員を増やす機会になったと思われる。また、研修の主催者側から「（受講者が）体験的に学ぶ良さを実感したり、子どもの発達や学習のねらいに応じた学習計画を立てる重要性を考えたりすることができた」や「実際に実験を体験し効果的な子どもへの声かけ等の助言を受けたことが、（受講者の）先生方にとって実りある研修になった」という感想からも、5年間の事業方針に掲げていた、研修によって教師自身の「体験」への支援につながったと捉えている。

また、環境や生態、生物多様性などの課題を「地域や学校などでどうできるかをより深い学びあいや持続的な実践につなげる」ような琵琶湖学習を総合的に支援していく。

○事業目標 4 もっと使いやすい博物館へ

・ **実施目標**：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。

・ **評価指標**：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

・ **内部評価**

展示室において、最新情報を踏まえた展示更新を随時行い、最新情報を踏まえた企画展示およびギャラリー展示、トピック展示等を実施した。また、職員や地域の人による活動が来館者に見えるようにするため、オープンラボでの活動を推進し、展示室でもその活動紹介を行った。ICTの利用による展示室でのガイド「ポケット学芸員」では、日本語と英語の2言語のサービスを提供しており、来館者の利便性向上に寄与しているが、言語の追加はできなかった。

展示室における ICT を使ったより深いコンテンツへのアクセスについては、YouTube の「びわこのちからチャンネル」の動画にアクセスする案内を展示室に設置して利用を促進した。

今後は、DX事業の成果なども取り入れて具体的なコンテンツを充実させ、展示室での学びを深める工夫を継続するとともに、引き続きインターネット環境の改善に努める。

・ **各重点事業の目標と実施状況**

4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

(実施状況と評価)

音声ガイドアプリである「ポケット学芸員」では、日本語（令和4年度～）および英語（令和5年度～）の2言語による展示解説文と音声による説明を提供している。さらに中国語の追加も準備を進めていたが、令和7年度内には実現しなかったため、早期の追加を目指していく。また、テキストデータがすでにあるスペイン語とポルトガル語についても、今後の音声データの追加の可能性を検討したので、導入を目指したい。

4-2. 「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長

(実施状況と評価)

展示室内でのインターネット利用環境が改善され、電子図鑑や「おうちミュージアム」のコンテンツに加えて、YouTube「びわこのちからチャンネル」の動画へのアクセスが可能になり、展示室内にアクセス用のQRコードを設置した。概ね順調に進んでおり、今後は、さらに多くの動画、DX事業の成果物へのアクセスポイントを増設する予定である。懸念事項としては、令和8年度から展示室で利用できる free Wi-Fi の契約がなくなるため、一定期間使用環境の悪化が予想される。

4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

(実施状況と評価)

全ての常設展示室で、展示内容の更新を行い、小規模な展示更新を複数実施できた。予算の関係で大規模更新はできなかったが、引き続き機器類（照明、映像など）の入れ替えや展示手法の見直しを進めた。ビワコオオナマズ水槽など、しばらく閉鎖されていたエリアの展示再開に向けての工事も大幅に進捗した。

企画展示およびギャラリー展示では、最新の研究成果を親しみやすい形で利用者に提供しているほか、トピック展示等を含めて、様々な試験研究機関や地域で活動を行う個人や団体とも協働して展示を行うなど、内外の協力を得て展示の内容の充実や成長を推進できている（詳しい内容は年報を参照）。

○事業5の目標 より多くの人が利用する博物館へ

・ **実施目標**：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。

・ **評価指標**：館内および館外からも利用がしやすくなり利用が増える

・ 内部評価

デジタルミュージアムにかかるコンテンツ各種の追加を適宜行ったことによって、博物館から発信する各種情報の充実を順調に進めることができた。次年度以降については、新たな取組を進め、資料提供や SNS を活用して利用促進を目指す。また、常設展示室や企画展示との連携を一層強化し、展示室とオンラインの両方からの利用を促進していく。

また、YouTube チャンネルへの動画掲載等効果的な訴求を行ったことにより、年度当初から約3倍のチャンネル登録者数となり、公立の博物館では全国で2番目に多い登録者数となった。

さらに、新たに湖上交通の定期運航が始まったことから、湖上交通利用者への団体割引の適用をはじめ、来館者への周知を行ったほか、教育旅行や団体旅行での活用に向けて、旅行会社等への営業等連携を進めることができた。

・ 各重点事業の目標と実施状況

5-1. ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

博物館のホームページに、「電子図鑑」、「3D 図鑑（考古、動物）」、および「びわはく GIS」のコンテンツを順調に追加できた。

また、当館の YouTube 動画チャンネル「びわこのちからチャンネル」では、動画を18本公開し、博物館への関心が高い層に訴求を行ったことで、登録者数が約9千人から目標を1.5万人としていたところ、約3.4万人へと目標の倍以上と大幅に上回ることができた。さらにナイトミュージアムについて X で発信したところ、120 万以上の再生とこれまでにない再生数となった。

5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

毎年実施している来館者アンケートでは、アンケート項目について、専門家への相談を行ったほか、当館の博物館学領域においても検討を重ね、来年度の30周年目のアンケートに向けた検討を実施した。

さらに従来に来館者アンケートに加え、来年度に30周年を迎えることから、びわ博フェスの際にトピック展示として「私とびわ博ヒストリー思い出とメッセージでつなぐ「みんなで作る展示」」を設け、来館者からこれまでの30年、またこれからの当館とのかかわりを考えていただく機会を設け、多様な意見を収集することができた。

5-3. 来館しやすい環境の整備

(株) 壱兵衛造船所が、令和7年4月12日から12月14日まで新たな湖上交通として烏丸半島港とおごと温泉港、におの浜観光栈橋等をつなぐ航路を定期運航したことから、当館としても湖上交通利用者に対して、団体割引を適用するとともに、ポスターやチラシ、指導標を設置し来館者への周知を図るなど連携した取組を実施した。

また、ナイトミュージアムの際には、路線バスの臨時便の増便を行ったほか、プレミアムナイトツアーにおいて、ナイトクルーズについても試験的に行うことができた。

○事業6の目標 博物館の活動を安定して継続する

・ **実施目標**：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます。

・ **評価指標**：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

・ **内部評価**

当館建物の基幹部分については、全庁的な長期保全計画に基づいて計画的に更新しているが、その対象外の施設・機械設備等の改修について、当館独自の施設設備修繕計画を策定しており、これらの計画に沿って修繕を行ったが、施設や機械設備の健全度の判定には高度な専門知識が必要であり、専門業者による診断なども踏まえ、当館の将来像を見据えた長期的な更新計画を進めるべきである。

そのため、第三次中長期基本計画の中間見直しを実施し、事業目標6を「持続可能な博物館づくり」と修正し、来年度から長期ビジョンの策定や施設・設備の大規模改修、財源確保の仕組みづくりに向けた検討を進めることとした。

・ **各重点事業の目標と実施状況**

6-1. 老朽化した施設の改修と災害への備え

大規模施設改修として、防火設備（火災報知機等）更新や防犯カメラ更新、高圧電力受変電設備等の改修を行った。令和8年度に向けては、中長期基本計画の中間見直しにより、老朽度・健全と調査にかかる予算を新たに確保したほか、エレベーター・エスカレーターの改修等にかかる予算を確保した。

災害時の対応については、危機管理マニュアル統合版を修正するとともに、訓練を2回実施した。また、国民保護法に基づく緊急一時避難施設の指定の依頼を昨年度に同意したことから、今後、一時避難所としての役割を踏まえた施設整備も進める必要がある。

6-2. 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

これまでの取組に加え、企業等から展示事業等に限定した寄附を受けることで、水族企画展示や子ども・若者向けの新規事業である、「生き物ふれあい体験・ワークショップ事業」や「絵本製作プロジェクト事業」など新たな取組を実施することができた。

また、第三次中長期基本計画の中間見直しにおいて、より適切な入館料のあり方や、琵琶湖博物館が有する人的物的資産や価値を活かした新たな歳入確保の方策を検討することや、研究費や研究備品費の財源の確保に向けて、独自の基金を設ける等、安定的な研究活動に資する仕組みづくりを進めることとした。

新規の寄附等の例

水族企画展示「淡水魚から見る世界の湖沼」にかかる物品寄附（(株)木下カンセー様）

- ・ 水槽内水温調整用クーラー、展示魚類等の物品寄附

展示を活用した子ども若者学習支援事業への助成（(公財)平和堂財団様）

- ・ 生き物ふれあい体験・ワークショップ事業（令和8年1月～3月、20日間実施）
- ・ 絵本製作プロジェクト事業（A4判変形、上製本90部、中綴じ製本300部製作）